

『星を手繰る』

著：佐竹ガム

ill：紀伊カンナ

店の戸締まりをして外に出た昴が「お前の家まで、歩いて何分くらい？」とためしに尋ねたら、鴛沢は四十分くらい、と答える。

「じゃあ歩いて帰ろうぜ」

「え、でも寒いよ、大丈夫？」

「大丈夫じゃないけど、歩いて帰ってみたいなって思って。でもお前が嫌ならやめとく、寒いし」

「ううん、俺はいいんだけど。じゃあ、無理そうだったら途中でタクシー呼ぼう」

「うん」

そうしてネオンの輝く街を離れ、二人並んで歩いた。昼間は賑やかだった中心部も、さすがにこの時間ともなれば車通りも明かりもほとんどない。静かなものだった。

北海道の一月は、深夜から明け方にかけて特に冷え込むらしい。厚手のコートの中で身を縮めながら、昴は黙って雪を踏みしめながら歩いた。

「昴、寒くない？」

「寒いよ。けど、こういうのも北海道っぽくていいなって思ってる。でも鴛沢まで付き合わせちゃってごめんな、お前こそ寒いだろ」

「俺は一人で帰るとき、ときどき歩いてたから慣れてるよ」

鼻を赤くしながら笑う鴛沢は、昴と違って肩を竦めてもいないし雪道を歩くのにためらいもしない。北海道に住んでまだ数年のはずなのに、すっかり地元の間人という感じがした。

「あー、星、見えないな」

鴛沢から視線を逸らして空を見上げる。さっき店の外へ出たときと同じように、空には分厚い雲がかかっていた。星のひとつも見えない空だ。

「うん？ そうだね、この時期はなかなか」

昴の言葉に釣られたように、鴛沢が空を仰ぐ。のんびりと告げられて、昴は驚いて目を丸くした。

「えっ、今日だけじゃないんだ？」

「うーん。冬はけっこう、曇り空ばかり……な気がする」

たまたま今日が悪天候なだけだと思っていた。くすぶるような曇り空をもう一度見上げて嘆息する。

冬だから、空気が澄んでいてそれはたくさんの星が見えるのだと思っていた。

「なんだ……じゃあ天文台行っても見えるかどうかわかんないんだな」

北海道の満天の星空、楽しみにしてたんだけど、と昴が小さく呟く。

「でも、晴れたらすごいよ」

「そっか。じゃあこっちにいる間に一回は晴れてくれたらいいなあ……」

かじかんだ手を擦り合わせながら言うと、鴛沢も「そうだね」と同意した。

「……一緒に行きたいな」

ややあって、ぽつりと呟く。ごく小さな声だったのに聞こえてしまったのは、やっぱり静かすぎるからだろうか。雪が音を吸収するって、何かの本で読んだ表現は本当だったらいい。時折通り過ぎるタクシーの音も、東京で聞くよりずっと静かな気がした。

「どこに」

「えっ……、あ、えっと、天文台」

聞こえているとは思っていなかったのか、鴫沢は少し慌てたような顔をしてから答える。なんだ、と拍子抜けして、昴は言った。

「誘うつもりだったけど。店の定休日に合わせて……って、そういや定休日っていつ？」

「定休日はないよ。今までも、一回も休んだことないな」

さらりと言われて、昴は瞠(どう)目(もく)して鴫沢を見上げる。

「まじで!？」

「うん」

「店開いて六年目だっけ？ その間、たったの一度も？」

早口で尋ねると、鴫沢はまた「うん」と頷いた。

雨の日も、風の日も、雪が降っても雷(かみなり)が鳴っても、暑くても寒くても。自分の体調が悪くても。

なんでもないことのように言っているが、それはすごいことなんじゃないだろうか。

「……あ、一回だけ。昨日、一度は開けたけど、その、すぐ閉めたから」

昨日のことを思い出しているのか、鴫沢が恥ずかしそうに言う。

「ああ……でもあれも一応開いてただろ。ていうか、なんで？ ポリシーとか？ 休みないと用事とか済ませられないだろ？ 風邪引いたときはどうすんの？」

「大事な用事ってそんなにないし、あっても昼間は暇だから昼間のうちに済ませられるし。体は丈夫なほうだから、風邪なんて引かないし」

そこで一旦言葉を止めて、言いにくそうに続けた。

「ポリシーっていうか、その、もしかしたら昴がいつか来るかもしれないって思うと、毎日店に出なきゃって考えるようになって……。いないときに来たらどうしようとか、半分強迫観念みたいなの」

「はあ、」

呆れとも感嘆ともつかない返事をしながら、昨日鴫沢が、来てほしいと願い続けていたから昴はあの店にたどり着いたのだ、と言っていたことを思い出す。

あのとき昴は否定したけれど、案外本当のことだったかもしれない。だってあまりにも、偏執的すぎる。なんらかの不思議な力が働いたのかもしれない。何しろ宇宙人じみているから、そんな力があってもおかしくないんじゃないかと思ってしまう。

ぼんやり鴫沢の顔を見上げていると、鴫沢は不安そうに首を傾げた。

「引いた？」

「引いたっていうか、なんかもう、いっそちょっと面白い」

「よかった」

「褒めてないけども」

「……すみません」

「まあいいけど、これからはちゃんと休んだほうがいいんじゃないの。せめて俺がいる間ぐら

い」

自分で言うからちょっとおこがましいな、と思ったけれど、言ってしまったものは仕方がない。それに相手は鴛沢だから、間違っても昴に対しておこがましいなんて印象は抱かないだろうと思った。思った次の瞬間には自己嫌悪する。

なんだその、不(ふ)遜(そん)な自信は。

昴の葛(かっ)藤(とう)なんて気付かずに、鴛沢はやっぱり昴の発言になんの疑問も持っていない様子で笑った。

「うん……でもやっぱり、きっとこれからも毎日店は開けると思う。今まで続けてきたことから」

「やっぱりポリシーになってんじゃん」

「そうか、そうかも」

へら、と笑って鴛沢が頷く。鴛沢の住むマンションは、いつの間にかもうすぐそこだった。

本文p108～114より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>